

三陸の海を放射能から守る  
岩手の会

ミニコミ通信 第29号

http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm

《岩手の環境 / RI 廃棄物 / 再処理》

http://briefcase.yahoo.co.jp/k\_imag

《まった再処理分庫》

止めよう！  
《再処理》

2006 (平成 18) 年

11月 15日

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX

019-623-4636

郵便振替

02240-5-402650

# 原発の約100倍の濃度のトリチウムを放出



写真  
六ヶ所再処理工場  
原燃説明会配布パンフより。

日本原燃は十月二七日記者会見を行いアクティブ試験第二ステップの約五〇トンの使用済み燃料のせん断作業が終了したと発表しました。これまで流された放射能廃液は、トリチウムが九〇兆ベクレルで、一般原発の濃度規制で計算すると平均百倍以上も上まわる驚くべき高数値です。特に七月八日の廃液は七二〇倍と計算されました。

現在の法律では再処理工場の場合のみ、海洋への放出は「工場周辺の住民への線量(シーベルト)が安全であるならば合法」とされています。同じ放射能なのになぜ基準が異なるのか各地で疑問の声があがっており、沿岸の八つの市町村議会では「放射能海洋投棄規制法(仮称)制定」の請願が採択され、国への意見書があげられています。

「ウラン・プルトニウム混合酸化物」の生産過程へ  
記者会見で児島伊佐美社長は、「第二ステップでせん断を予定していた六〇トンの使用済み核燃料のうち、約五〇トンが終了した。これまでの「せん断・溶解」「分離」

六ヶ所再処理工場トリチウム排出データ

月	ア、放出量 (億 Bq)	イ、放出回数	ウ、1回あたり 放出量(億 Bq)	エ、平均濃度 (1立方センチメートルあたりの Bq)(ウ ÷ 6億 cm <sup>3</sup> )	オ、一般原発濃度規制値の何倍か(エ ÷ 60 Bq)
5月	39000.0	6	6500	1,083.3	18.1
6月	190000.0	6	31667	5,277.8	88.0
7月	440000.0	3	146667	24,444.4	407.4
8月	180000.0	5	36000	6,000.0	100.0
	849000.0	20	42450	7,075.0	117.9

ア、日本原燃(株)ホームページ・月別発表による

イ、青森県議会答弁による

ウ、ア÷イ

エ、ウ ÷ 6億 cm<sup>3</sup>(廃液タンクの容量)

オ、一般原発のトリチウムの濃度規制値「1 cm<sup>3</sup>あたり60 Bq以下」

経済産業省告示第187号第9条1項 「(実用発電用原子炉等の)空气中又は水中の放射性物質の濃度限度は、3月間について平均濃度が次のとおりとする。(「別表第二」第6欄を指示。)第6欄「廃液中の濃度限度」には 3Hは  $6 \times 10 \text{ Bq/cm}^3$  とある。

\*再処理工場の廃液は 科学技術庁告示第13号第9条3項には「放射性廃棄物に海洋放出に起因する線量当量限度は3月間について250マイクロシーベルトとする」とある。第1項に濃度規制条項があるが適用していない。

「精製」の各工程の試験に加え、十月三日から、「ウランの脱硝」の工程を開始する」と語りました。そして十一月二日に原燃は、「ウラン・プルトニウム混合酸化物」の生成を開始した」と発表しました。

ヨウ素129を八月の十倍放出(九月分の報告書)  
十月三十一日、九月分の放射能海洋投棄のデータが、日本原燃ホームページに掲載されました。トリチウムが五兆ベクレルで累計九〇兆ベクレルに達しました。今回はヨウ素129が前月の十倍近い三九〇億ベクレルが放出されました。

放射能に区別はない  
原発からであれ再処理工場からであれ、流される放射能に区別はない環境や人間に害を与えます。すでに九〇兆ベクレルもの放射能が三陸の海に放出されているのに、責任ある諸機関等から、充分県民に伝えられていないのは何故だろうか疑問の声が上がっています。

## 書物の紹介

### 『朽ちていった命』

- 被曝治療 83 日間の記録 -

NHK「東海村臨界事故」取材班

新潮文庫 2006年10月1日 発行

定価 438円(税別)



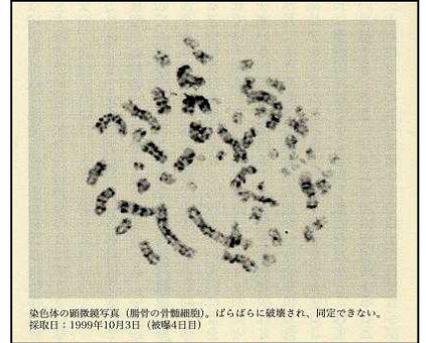
(右手) 東大病院転院時には、赤く腫れているだけだった。撮影：1999年10月7日(被曝8日目)

#### 事故後 8 日目の 大内さんの手。

東大病院入院時には、赤く腫れているだけだった。しかし、26日目の写真では表皮が失われ、赤黒く変色していた。(同書中綴じ写真)

**JCO事故から  
七年目**  
一九九九年九月三十日茨城県東海村JCO臨界事故からすでに七年が経ちました。二〇〇〇年シールド前後と推定される大量の中

性子線を浴びた大内さんは、東大病院に運び込まれた時、普通に話しもし、元気であったといいますが、事故で浴びたエネルギーは体温を千分の二度上昇させるほどのわずかなものだったといえます。しかし、放射線の持つ強力な電離エネルギーは、彼の体細胞の構成分子をずたずたに引き裂き、DNAを載せた染色体をバラ



染色体の顕微鏡写真(腸骨の骨髄細胞)。ばらばらに破壊され、固定できない。採取日：1999年10月3日(被曝4日目)

事故後 4 日目の大内さんの腸骨の骨髄細胞の顕微鏡写真。染色体がバラバラにされている。(同書 59 頁)

**DNAは今を生きる  
私たちの体の設計図**  
DNAには遺伝情報が刻まれている言いますが、それは、遺伝のみに係わるだけではなく、今を生きる私たちの体の新陳代謝を司る、すなわち「体細胞の設計図」であることに気づかせられます。大内さんの体は必要な新陳代謝の機能が失われてしまいました。皮膚や骨髄の細胞が再生産されず、白血球や血小板がどんどん減り始め、腸の粘膜もそげ落ちてゆきました。リ

バラにしてしまつたのです。この本は、「細胞再生の設計図」の多くを失った大内さんの体を先進医学の総力を挙げて治療した医療チームと、大内さんの家族の、苦悶、煩悶の記録です。日本でも起きてしまった初の臨界事故の悲惨な実相に衝撃を受けます。

ンパ球が破壊され免疫機能が喪失したので無菌室で厳重に管理しながら、大量の輸血と抗菌剤、麻酔薬の投与がなされました。治療は手探りでした。白血球の型が唯一適合した妹さんからの輸血により、大内さんの体内で自分の血液を作り出す細胞がやっと育ち始めます。しかし、しばらくすると、再び傷ついた染色体が発見されます。医療チームは必死になって原因究明を行います。ついに解明できませんでした。

東海村に突然出現した人工の「裸の原子炉」から中性子線が放射されました。人類は長い自然史の進化のはてに、「水の惑星地球」で、六〇兆の細胞、三〇億のDNA情報を持つという「人体」に到達しました。その人体がこの中性子線に貫かれて崩壊して行ったのです。

この事件は原子核分裂の連鎖反応を人間が意のままに制御出来るなどと考える、技術に対する過信、人間のおごりを鋭く告発しています。

(尚)

#### 宮古での

映画『六ヶ所村ラプソディー』上映会と

鎌仲ひとみ監督と語る会「ご案内

核燃基地とともに暮らす六ヶ所村の人々の生活を記録したこの映画を鑑賞し、監督の思いを聞いて、三陸の海、わが郷土の自然・環境・そして子ども達の未来を考える機会にしたい。

語る会 会場 宮古湾温泉マース

十一月二十五日(土) 無料  
午後一時半～三時

上映会 会場 シートピアなど

十一月二十六日(日) 会費五百円  
午前九時半～十二時

主催 「六ヶ所村ラプソディー」を観る会  
共催 母と女性教職員会 下閉伊支部  
こどもたちの教育と未来を考える会

#### 盛岡での

映画『六ヶ所村ラプソディー』上映会

六ヶ所再処理工場は消費者にとって何を意味するのか。消費者として考える。

上映会(映画一・九分)

会場 盛岡市 キャラホール小ホール  
入場料 八〇〇円(当日千円)

十一月二十六日(日) 中高生五〇〇円(当日六〇〇円)

一回目午後二時から  
二回目午後六時から

一回目・二回目ともに上映後に  
鎌仲監督のトークがあります。

主催 「六ヶ所村ラプソディー」  
盛岡上映実行委員会

後援 いわて生協、盛岡市教育委員会など